

板屋谷内B・C古墳群・堂前遺跡発掘調査報告

— 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告VII —



2008年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所



上 板屋谷内B・C古墳群 全景（南から）

下 板屋谷内B・C古墳群 C古墳群（西から）



板屋谷内B·C古墳群 C 6号墳出土遺物



上 塚前遺跡 縄文時代面全景（北東から）

下 塚前遺跡 縄文土器



上 堂前遺跡 古代面全景（真上から）

下 堂前遺跡 古代土器

板屋谷内B・C古墳群・堂前遺跡発掘調査報告

— 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告VII —

2008年

財団法人 富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査事務所

序

能越自動車道は、北陸自動車道の小矢部・砺波ジャンクションから北上して高岡市を通り、石川県の輪島市に至る高速道路として建設が進められています。その建設に伴い、当事務所では平成4年度から数多くの遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は、平成13年度と16年度に調査した高岡市の板屋谷内B・C古墳群及び堂前遺跡の成果をまとめたものです。

板屋谷内B・C古墳群は、平野を一望できる西山丘陵に立地しています。古墳群の一部に過ぎませんが、7基の古墳を発掘したところ、C6号墳は200を超える玉類のほか、2面の鏡、1振りの鉄剣を副葬した中期の古墳であることが明らかになりました。

堂前遺跡は、西山丘陵に細長く入り込んだ谷の奥に位置しています。白鳳時代の四面庇をもつ掘立柱建物跡がみつかり、出土遺物や地名等から、祭祀に関わる特殊な遺跡であろうと考えられます。

発掘調査は、地中に残された遺物や痕跡から、歴史書には表れない人々の生活をひもとく方法です。今回の調査では、古墳時代の有力者の墓と、白鳳時代の建物の跡を明らかにすることができました。本書が地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

終わりに、発掘調査に際してご協力を頂きました関係機関に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

財團法人富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査事務所
所長 岸本雅敏

例　　言

- 1 本書は富山県高岡市五十里地内に所在する板屋谷内B古墳群・板屋谷内C古墳群（以下本書では板屋谷内B・C古墳群と表記する）と、同じく高岡市西海老坂地内に所在する堂前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は国土交通省北陸地方整備局からの委託を受けて、財団法人富山県文化振興財団が行った。
- 3 両遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間　　堂前遺跡　　平成13（2001）年10月22日～12月11日

　　板屋谷内B・C古墳群　　平成16（2004）年6月7日～12月16日

整理期間　　平成16（2004）年4月1日～平成19（2008）年3月31日

- 4 本書の編集は、金三津道子、新宅　西が担当した。本文執筆は、金三津のほか、菅田　薰（現 財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、越前慎子、町田賢一、杉山大晋（現 小浜市教育委員会）、西川麻野が担当し、執筆分担は文末に記した。

- 5 遺物の写真撮影は、写房楠華堂、アオヤマスタジオに委託した。

- 6 自然科学分析は、以下の諸機間に委託し、その結果について報文を得た。

花粉・珪酸体・赤色土分析　　㈱パリノ・サーヴェイ

ガラス玉成分分析　　㈱パレオ・ラボ

琥珀玉の同定及び科学分析　　㈲元興寺文化財研究所

須恵器胎土分析　　胎土分析研究会

鏡の付着顔料分析及び鉛同位体比分析　　㈲元興寺文化財研究所

金属製品成分分析　　㈲元興寺文化財研究所

金属製品放射性炭素年代測定　　㈲元興寺文化財研究所

金属製品螢光X線分析　　㈲元興寺文化財研究所

- 7 遺物の保存処理は、以下の諸機間に委託した。

内行花文鏡　　㈲元興寺文化財研究所

琥珀玉　　㈲元興寺文化財研究所

金属製品　　㈲大阪市文化財協会、㈲元興寺文化財研究所

- 8 発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

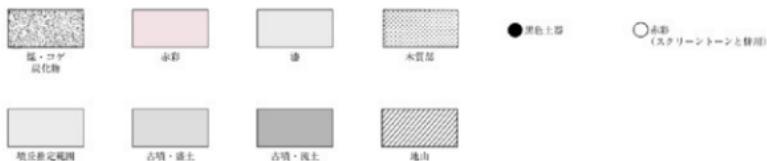
赤澤徳明、池野正男、伊藤雅文、大賀克彦、岡本淳一郎、黒崎　直、島田修一、高橋浩二、

豊島直博、西井龍儀、布尾和史、野島　永、林　大智、松崎直実、山口忠明、

高岡市教育委員会、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、氷見市教育委員会

凡　例

- 1 遺跡ごとに検出した主な遺構・出土遺物の内容については、章末に一覧で掲載している。
- 2 時代区分は、板屋谷内B・C古墳群では便宜上、前期（4世紀）、中期（5世紀）、後期（6世紀）、終末期（7世紀）としている。
- 3 本書で示す方位は全て真北である。
- 4 遺跡の略号は、板屋谷内B・C古墳群では古墳名を統合「021Y-古墳名」とし、堂前遺跡では「02DM」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 5 遺構の略号は以下のとおりである。
S B：建物、S D：溝、S K：土坑、S P：柱穴、S X：その他
なお、板屋谷内B・C古墳群においては、S D：周溝、S K：埋葬施設（墓坑）として使用し、古墳自体には略号を用いなかった。
- 6 遺物は遺跡ごとに連番を付し、本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は一致する。
- 7 施釉陶磁器等の釉の掛かる範囲は1点鎖線で示した。2種類以上の釉が掛かる場合や、絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。
- 8 遺物の煤付着部分及び赤彩部分等、遺構図中の地山等はスクリーントーンで示す。以下に図示したもの以外については、それぞれの図中に凡例を示した。



- 9 土層および遺構埋土の土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』を参照した。
- 10 遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下の文献を参考とした。
掘立柱建物：奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
古墳：白石太一郎 1985 『古墳の知識 I 墳丘と内部構造』東京美術
- 11 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
 - ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
 - ②規模・法量の（ ）内は現存長を表す。
 - ③胎土色調・釉色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』・財團法人日本規格協会『標準色票 光沢版』を使用し、釉色調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお、陶磁器のうち複数の色が見られる場合は、最も多く使用されている色を記し、その他は備考に記す。ただし、透明釉の場合は記入しない。

目 次

第Ⅰ章 調査経緯	1
1 調査に至る経緯	1
(1) 調査の契機	1
(2) 分布調査	1
2 調査経過	4
(1) 調査方法	4
(2) 調査の経過	4
(3) 調査体制	7
(3) 確認調査	1
(4) 本調査	2
(4) 現地説明会	8
(5) 整理の経過	8
(6) 整理体制	9
第Ⅱ章 立地と歴史的環境	10
1 立地	10
2 歴史的環境	10
第Ⅲ章 板屋谷内B・C古墳群	17
1 遺跡の概要	17
(1) 概要	17
(2) 過去の調査	17
2 遺構と遺物	19
(1) 板屋谷内B 13号墳	19
(2) 板屋谷内B 14号墳	27
(3) 板屋谷内C 1号墳	30
(4) 板屋谷内C 2号墳	42
(3) 土層	17
(5) 板屋谷内C 4号墳	47
(6) 板屋谷内C 6号墳	54
(7) 板屋谷内C 7号墳	69
(8) 尾根	72
3 小結	75
第Ⅳ章 堂前遺跡	92
1 遺跡の概要	92
(1) 概要	92
2 遺構と遺物	94
(1) 縄文時代	94
(2) 古代	108
3 小結	114
第Ⅴ章 自然科学分析	129
1 板屋谷内B・C古墳群	130
(1) 自然科学分析	130
(2) ガラス玉の成分分析	138
(3) 琥珀玉の科学分析	144
(4) 須恵器の螢光X線分析	152
(5) 鏡の分析	157
(6) 鉄製品の金属学的調査	178
(7) 金属製品の放射性炭素年代測定	206
(8) 金属製品の螢光X線分析	209
2 堂前遺跡	211
(1) 堂前遺跡・岩坪岡田島遺跡出土須恵器の螢光X線分析	211
(2) 袋状鉄斧の金属学的調査	219

卷首図版目次

- 卷首図版 1 板屋谷内B・C古墳群 全景 C古墳群
- 卷首図版 2 板屋谷内B・C古墳群 C 6号墳出土遺物
- 卷首図版 3 墓前遺跡 繩文時代面全景 繩文土器
- 卷首図版 4 墓前遺跡 古代面全景 古代土器・袋状鉄斧

挿図目次

- 第1図 調査位置図
- 第2図 調査区位置図
- 第3図 調査地区区割図
- 第4図 周辺遺跡位置図
- 第5図 古墳分布図
- 第6図 板屋谷内B・C古墳群 全体図
- 第7図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B13号墳（表土除去後）
- 第8図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B13号墳（完掘）
- 第9図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B13号墳 SK 1 墓頂遺物出土状況
- 第10図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B13号墳 墓丘断面
- 第11図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 B13号墳
- 第12図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B14号墳（表土除去後）
- 第13図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B14号墳（完掘）
- 第14図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B14号墳 SK 2
- 第15図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 B14号墳 墓丘断面
- 第16図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 1号墳（表土除去後）
- 第17図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 1号墳（完掘）
- 第18図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 1号墳 SK 5
- 第19図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 1号墳 墓丘断面
- 第20図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 1号墳 SD 1 SD 1遺物出土状況 SK 3 SK 4
- 第21図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 1号墳
- 第22図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 2号墳（表土除去後・完掘）
- 第23図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 2号墳 SD 5 SK 2 SK 2遺物出土状況 SK 4
- 第24図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 2号墳 墓丘断面
- 第25図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 2号墳 尾根
- 第26図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 4号墳（表土除去後）
- 第27図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 4号墳（完掘）
- 第28図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 4号墳 墓丘断面
- 第29図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 4号墳 SK 2
- 第30図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 4号墳 SD 1 SD 1遺物出土状況 SK 3
- 第31図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 4号墳
- 第32図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 6号墳（表土除去後）
- 第33図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 6号墳（完掘）

- 第34図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 6号墳 S K 2～S K 4
- 第35図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 6号墳 S K 4 遺物出土状況
- 第36図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第37図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第38図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第39図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第40図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第41図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第42図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 6号墳
- 第43図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 6号墳 墳丘断面
- 第44図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 7号墳 (表土除去後・完掘)
- 第45図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 C 7号墳 S D 1 S D 1 遺物出土状況 S D 3
S D 4 S K 2
- 第46図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 C 7号墳
- 第47図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 尾根 S D 101 S K 102～S K 104
- 第48図 板屋谷内B・C古墳群 遺物実測図 尾根
- 第49図 板屋谷内古墳群 周辺古墳分布図
- 第50図 富山県の主な前期古墳出土土器
- 第51図 石川県の主な前期古墳出土土器
- 第52図 放射状区画塗・乳文鏡出土地点
- 第53図 板屋谷内C古墳群変遷図
- 第54図 堂前遺跡 基本層序
- 第55図 堂前遺跡 繩文時代面全体図
- 第56図 堂前遺跡 遺構実測図 S D 101 S D 102
- 第57図 堂前遺跡 遺構実測図 包含層 土器出土状況
- 第58図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) 包含層
- 第59図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) 包含層
- 第60図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) 包含層
- 第61図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) 包含層
- 第62図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) 包含層
- 第63図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) S D 102 包含層
- 第64図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) S D 102 包含層
- 第65図 堂前遺跡 遺物実測図 (縄文土器) S D 102 S P 5 包含層
- 第66図 堂前遺跡 古代面全体図
- 第67図 堂前遺跡 遺構実測図 S B 1
- 第68図 堂前遺跡 遺構実測図 S K 16 S K 17 S K 23 S K 25 S K 26
- 第69図 堂前遺跡 遺物実測図 (土器・陶磁器・金属製品) 包含層
- 第70図 堂前遺跡とその周辺の遺跡
- 第71図 堂前遺跡の地形
- 第72図 堂前遺跡の変遷
- 第73図 堂前遺跡と同時期の遺物

図版目次

- 図版1 航空写真
図版2 航空写真
図版3 板屋谷内B・C古墳群 調査前全景
図版4 板屋谷内B・C古墳群 調査後全景
図版5 板屋谷内B・C古墳群 調査後全景
図版6 板屋谷内B・C古墳群 B古墳群全景
図版7 板屋谷内B・C古墳群 C古墳群全景
図版8 板屋谷内B・C古墳群 B13号墳
図版9 板屋谷内B・C古墳群 B13号墳
図版10 板屋谷内B・C古墳群 B13号墳
図版11 板屋谷内B・C古墳群 B14号墳
図版12 板屋谷内B・C古墳群 B14号墳
図版13 板屋谷内B・C古墳群 B14号墳
図版14 板屋谷内B・C古墳群 C1号墳
図版15 板屋谷内B・C古墳群 C1号墳
図版16 板屋谷内B・C古墳群 C1号墳
図版17 板屋谷内B・C古墳群 C1号墳
図版18 板屋谷内B・C古墳群 C2号墳
図版19 板屋谷内B・C古墳群 C2号墳
図版20 板屋谷内B・C古墳群 C4号墳
図版21 板屋谷内B・C古墳群 C4号墳
図版22 板屋谷内B・C古墳群 C4号墳
図版23 板屋谷内B・C古墳群 C6号墳
図版24 板屋谷内B・C古墳群 C6号墳
図版25 板屋谷内B・C古墳群 C6号墳
図版26 板屋谷内B・C古墳群 C6号墳
図版27 板屋谷内B・C古墳群 C7号墳
図版28 板屋谷内B・C古墳群 尾根 SK103 SK104
図版29 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（土器） C1号墳 C4号墳
図版30 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（土器） C4号墳
図版31 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（土器） B13号墳 C2号墳 C7号墳
図版32 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（土器） C1号墳 C2号墳
図版33 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（玉類） C6号墳
図版34 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（玉類） C6号墳
図版35 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（玉類） B13号墳 C4号墳 C6号墳
図版36 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（玉類・金属製品付着布） C1号墳 C6号墳
図版37 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（金属製品） B13号墳
図版38 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（金属製品） B13号墳 C1号墳 C4号墳 C6号墳
図版39 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（金属製品） C6号墳
図版40 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（金属製品） C6号墳
図版41 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（金属製品） C6号墳 尾根
図版42 板屋谷内B・C古墳群 出土遺物（金属製品） B13号墳 C1号墳 C2号墳 C7号墳 尾根

国版43	板屋谷内B・C古墳群	X線写真（金属製品）	B13号墳
国版44	板屋谷内B・C古墳群	X線写真（金属製品）	B13号墳 C1号墳
国版45	板屋谷内B・C古墳群	X線写真（金属製品）	B13号墳 C2号墳 C4号墳 C6号墳
国版46	板屋谷内B・C古墳群	X線写真（金属製品）	C6号墳 尾根
国版47	板屋谷内B・C古墳群	X線写真（金属製品）	C6号墳
国版48	板屋谷内B・C古墳群	X線写真（金属製品）	C1号墳 C7号墳 尾根
国版49	堂前遺跡	縄文時代面全景	
国版50	堂前遺跡	縄文時代 SD102 包含層	
国版51	堂前遺跡	縄文時代 SD102 包含層	
国版52	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	包含層
国版53	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	包含層
国版54	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	包含層
国版55	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	包含層
国版56	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	包含層
国版57	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	SD102 包含層
国版58	堂前遺跡	出土遺物（縄文土器）	SD102 包含層
国版59	堂前遺跡	古代面全景	
国版60	堂前遺跡	古代 SB1	
国版61	堂前遺跡	古代 SB1 SP2 SP3 SP7 SP12	
国版62	堂前遺跡	出土遺物（土器）	包含層
国版63	堂前遺跡	出土遺物（土器・陶磁器・金属製品）	包含層

表目次

第1表	既往の調査一覧	3
第2表	調査一覧	7
第3表	周辺遺跡一覧	13
第4表	周辺古墳一覧	16
第5表	板屋谷内C6号墳出土管玉法量一覧	64
第6表	板屋谷内B・C古墳群 副葬品一覧	76
第7表	放射状区画をもつ珠・乳文鏡一覧	80
第8表	板屋谷内B・C古墳群 古墳一覧	85
第9表	板屋谷内B・C古墳群 遺構一覧	85
第10表	板屋谷内B・C古墳群 土器一覧	86
第11表	板屋谷内B・C古墳群 金属製品一覧	86
第12表	板屋谷内B・C古墳群 玉類一覧（1）～（5）	87
第13表	堂前遺跡とその周辺の遺跡一覧	117
第14表	堂前遺跡 縄文時代 溝一覧	123
第15表	堂前遺跡 古代 建物一覧	123
第16表	堂前遺跡 古代 柱穴一覧	123
第17表	堂前遺跡 古代 土坑一覧	123
第18表	堂前遺跡 金属製品一覧	123
第19表	堂前遺跡 土器一覧（1）～（5）	124
第20表	自然科学分析一覧	129

第Ⅰ章 調査経緯

1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

能越自動車道（一般国道470号）は、高規格幹線道路網の一環として昭和62年に策定された。路線は北陸自動車道・小矢部砺波JCT（ジャンクション）から高岡市及び氷見市を通過し、石川県輪島市に至る。北陸自動車道、東海北陸自動車道等と連結することにより、富山県西部地域や能登地域と東京・名古屋・大阪との交流の活性化と、地域幹線道路の交通緩和及び災害に強い道路網の形成を目的としている。これまでに小矢部砺波JCTから高岡北IC（インターチェンジ）までの約18km（高岡砺波道路）と高岡北ICから氷見ICまでの約11km（氷見高岡道路）が開通し、さらに北上して氷見北・灘浦ICが設置される予定となっている。

道路の建設計画は平成2年4月に建設省（現 国土交通省、以下国土省）から富山県教育委員会（以下県教育委員会）に示され、埋蔵文化財の取り扱いについて建設省北陸建設局・県教育委員会・小矢部市教育委員会の三者により協議が行われた。その結果、埋蔵文化財の分布状況を把握するため、小矢部市の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。以後、能越自動車道関係の調査は、分布調査を県教育委員会、確認調査を地元市教育委員会及び当財団、本調査を当財団が主体となり当該市町教育委員会の協力を得て実施している。

(2) 分布調査

平成12年度の分布調査は本線敷地内の高岡市域、氷見市域（高岡北IC～氷見IC間）を対象とし、3月22日～29日まで8日間で実施された。その結果、板屋谷内B古墳群、板屋谷内C古墳群、中尾横穴墓群、中尾坊田遺跡、中尾新保谷内遺跡、飯久保城跡、正保寺遺跡、中谷内遺跡、栗原A遺跡の9ヶ所の周知の遺跡の他、NEJ-13～21の9ヶ所の埋蔵文化財包蔵地及び1ヶ所の埋蔵文化財包蔵推定地（中尾地内）の存在を確認した。

(3) 確認調査

分布調査の結果報告から、遺跡推定地の今後の取り扱いについて検討が行われた。その結果、遺跡のより明確な範囲と内容について把握するため、確認調査を実施することとなった。確認調査は国土省の委託を受け、平成2年度は小矢部市教育委員会が、平成4年度以後は地元教育委員会及び当財団が実施した。

平成13年度の確認調査は5月16日から本調査の日程と調整しながら随時実施した。NEJ-13・14・20・21の4ヶ所の埋蔵文化財包蔵地と、中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡の2ヶ所の周知の遺跡を対象とした。その結果、遺構・遺物が確認され、五十里沼田遺跡、堂前遺跡、中尾茅戸遺跡、



第1図 調査位置図

神明北遺跡・大野江淵遺跡を新たに認定し、中尾新保谷内遺跡の範囲を確認した。中尾新保谷内遺跡は中尾坊田遺跡の東側に隣接し、両遺跡は一部が重複する形となっており、確認調査の結果、遺跡を二つに分けることが不可能であると判断されたため、氷見市教育委員会との協議により、中尾坊田遺跡の名を廃し中尾新保谷内遺跡としたものである。本調査の必要な面積は合計約73,600m²と確定した。このうち、堂前遺跡では調査対象地の南東部分で遺跡の広がりを確認し、本調査も併せて実施した。

平成15年度の確認調査はNEJ-19と板屋谷内B・C古墳群を対象とした。NEJ-19の確認調査は5月13日から6月2日まで実施した。調査結果は6月10日に国土省、県教育委員会、当財団の協議で報告され、遺跡範囲が南側丘陵斜面に広がる可能性があること、山林部分が調査できなかつたことから、樹木の伐採が要望された。9月18日に国土省、県教育委員会、富山県森林組合連合会、当財団で協議が行われ、NEJ-19及び板屋谷内B・C古墳群の伐採を優先して行うこととされた。伐採終了後、NEJ-19の調査を10月20・21日、11月13・14日、板屋谷内B・C古墳群の調査を11月17日から12月2日まで行った。その結果、NEJ-19では遺構・遺物が確認され上久津呂中屋遺跡と命名され、遺跡の北端で一部本調査を実施した。板屋谷内B・C古墳群では5基の古墳を再確認し、新たに1基の古墳を推定した。また、竹林・棚田の開墾や表土の流失等により旧地形が大きく改変されているため、尾根全面の調査が必要と判断された。本調査の必要な面積は合計約35,500m²と確定した。

(4) 本調査

本調査については平成3年4月に、国土省、県教育委員会、当財団の協議で、遺跡の範囲が確定している五社遺跡、石名田遺跡、地崎遺跡の本調査の要望が出された。その結果、県教育委員会及び当財団は、東海北陸自動車道関連の調査が終了する平成4年度から、同財団が能越自動車道関連の本調査を受託することで合意し、調査体制の整備及び調査方法の検討を進めた。

平成4年度は最も南側に位置する五社遺跡を対象とし、以後継続して開鶴大滝遺跡・地崎遺跡・石名田木舟遺跡・蓑島遺跡・江尻遺跡・下老子笹川遺跡・近世北陸道遺跡・手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡・板屋谷内B・C古墳群・堂前遺跡・懇領野際遺跡・懇領浦之前遺跡・上久津呂中屋遺跡・中谷内遺跡・中尾茅戸遺跡・中尾新保谷内遺跡・神明北遺跡・大野江淵遺跡の調査を実施した。

堂前遺跡の本調査は、平成13年度に実施した。堂前遺跡は同年に確認調査を行い、調査対象地の南東部分で遺跡の広がりを確認したものである。上層（古代）と下層（縄文時代）の2面の遺構面があり、10月22日から12月11日まで本調査を実施しており、調査延面積は1,668m²である。

板屋谷内B・C古墳群の本調査は平成16年度に6月7日から12月16日まで実施している。調査範囲は尾根全面8,882m²で、調査時に新たに方墳1基を確認し、円墳5基・方墳2基の計7基の古墳の調査を行った。

年度	調査対象地	所在地	調査主体	調査面積 (ha)	調査期間	調査結果
平成12	高岡北IC~永見IC		県教委	分布調査 630,000	3/22~3/29	NEJ-13~21・埋蔵文化財包蔵推定地を確認 板山内B-C古墳群・山尾横穴墓群・山尾坊 田遺跡・山尾新保谷内遺跡・飯久保城跡・正 保寺遺跡・山谷内遺跡・栗原A遺跡を確認
	岩坪岡田島遺跡	高岡市岩坪	財团	本調査 17,514	5/22~12/19	古代・中世の集落を調査
	岩坪岡田島遺跡	高岡市岩坪	本調査 12,435	5/22~11/30	純文・古墳・中世の集落を調査	
	堂前遺跡	高岡市西町老坂	本調査 1,668	10/22~12/11	純文の谷・古代・中世の集落を調査	
平成13	NEJ-13	高岡市五十里	財团	確認調査 189 (対象面積14,370)	5/16~5/17	五十里沼田遺跡と命名
	NEJ-14	高岡市西町老坂	確認調査 90 (対象面積3,700)	7/30~7/31	堂前遺跡と命名	
	NEJ-20	永見市中尾	確認調査 882 (対象面積18,100)	10/25~10/29	中尾茅ヶ丘遺跡と命名	
	NTJ-21	永見市中尾・大野・ 飯川・大野新	確認調査 4,194 (対象面積90,710)	10/9~10/22	神明北遺跡・大野江瀬遺跡と命名	
	中尾切田遺跡・中尾新保谷内遺跡	永見市中尾	確認調査 1,143 (対象面積21,450)	10/22~10/25	中尾切田遺跡を中尾新保谷内遺跡と統合	
平成14	永見IC~瀬浦IC		県教委	分布調査 106,600	3/18~3/19	NEJ-22~27を確認 道跡・中程吉備郡・福井オヤチ古墳群・八代 城跡・北代・中世の山古墳・山尾坂遺跡を確認
	神明北遺跡	永見市中尾	本調査 3,120	7/3~9/25	古代・中世の集落を調査	
	中尾新保谷内遺跡	永見市中尾	本調査 13,076	5/22~12/6	古墳・古代・中世の集落を調査	
	中尾茅ヶ丘遺跡	永見市中尾	本調査 1,236	9/24~12/17	古墳の集落を調査	
	NEJ-15	永見市磐頭	確認調査 1,064 (対象面積16,900)	5/27~5/31	磐頭野殿遺跡と命名	
	NEJ-16	永見市磐頭	確認調査 767 (対象面積10,000)	6/3~6/6	磐頭磐頭之前遺跡と命名	
	NEJ-17	永見市矢田瀬	確認調査 639 (対象面積14,890)	7/17~9/25	道跡なし	
	NEJ-18	永見市上久津呂	確認調査 477 (対象面積5,910)	6/18~11/1	道跡なし	
	正保寺遺跡	永見市飯久保	確認調査 228 (対象面積16,900)	9/30~10/28	古代・中世の集落を確認	
	栗原A遺跡	永見市栗原	確認調査 76 (対象面積3,100)	6/25~6/28	古代・中世の集落を確認	
	中谷内遺跡	永見市中谷内	確認調査 1,455 (対象面積2,870)	6/6~12/3	純文・古墳・古代・中世の集落を確認	
	中尾横穴墓群	永見市中尾	確認調査 252 (対象面積4,210)	6/19~7/5	道跡なし	
	中尾茅ヶ丘遺跡隣地	永見市中尾	確認調査 198 (対象面積6,500)	11/19~11/20	道跡なし	
平成15	船積・字渡・姿・點燈 中尾新保谷内遺跡	永見市中尾	県教委	分布調査 53,500	3/22	NEJ-28~30-29の埋蔵文化財包蔵地を設定
	中尾茅ヶ丘遺跡	永見市中尾	本調査 7,415	5/27~30/3	古代・中世の集落を調査	
	中谷内遺跡	永見市中谷内	本調査 1,361	6/25~11/18	古墳・古代の集落を調査	
	上久津呂中尾遺跡	永見市上久津呂	本調査 30,672	5/26~12/25	古墳・古代の山中尾の集落を調査	
	磐頭野殿遺跡	永見市磐頭	本調査 1,020	11/13~12/16	弥生・古代・中世の集落を調査	
	磐頭磐頭之前遺跡	永見市磐頭	本調査 19,616	5/27~12/24	古墳・中世の集落を調査	
	栗原A遺跡	永見市栗原	本調査 13,378	5/27~11/12	弥生・古墳・古代・中世の集落を調査	
	正保寺遺跡	永見市飯久保	本調査 500	6/12~8/8	古代・中世の集落を調査	
	NEJ-19	永見市上久津呂	本調査 1,050	9/9~12/17	純文・中世の集落を調査	
	板谷内B古墳群	高岡市五十里	財团	確認調査 1,492 (対象面積5,255)	3/13~11/14	上久津呂中尾遺跡と命名
	板谷内C古墳群	高岡市五十里	確認調査 279 (対象面積13,200)	11/17~12/2	古墳・墓基を再確認し新たに古墳1基を確認	
	栗原A遺跡	永見市栗原	永見市教委	確認調査 289 (対象面積8,000)	5/29~6/2	弥生・古代・中世・近世の集落を調査
	板谷内B古墳群	高岡市五十里	財团	本調査 4,465	6/7~12/16	円筒2基を調査
	板谷内C古墳群	高岡市五十里	本調査 4,417	6/7~12/16	円筒3基・方2基を調査	
	上久津呂中尾遺跡	永見市上久津呂	本調査 17,490	5/28~12/14	純文・古墳・生糸・中世の集落を調査	
	中谷内遺跡	永見市中谷内	本調査 26,429	5/27~12/17	古墳・古代・中世の集落を調査	
	中尾新保谷内遺跡	永見市中尾	本調査 2,839	5/25~12/9	中尾の集落を調査	
	大野江瀬遺跡	永見市大野	本調査 12,229	5/27~11/9	中のの集落を調査	
	栗原A遺跡	永見市栗原	本調査 1,230	9/6~12/17	古代・近世の集落を調査	
	正保寺遺跡	永見市飯久保	本調査 1,500	6/1~9/2	古代・中世の集落を調査	
	中谷理藏文化財包蔵推定	永見市中尾	確認調査 109 (対象面積16,200)	11/18~11/19	道跡なし	
平成16	NEJ-22	永見市大野	確認調査 184 (対象面積1,800)	5/25~5/26	大野中世遺跡と命名	
	NEJ-23	永見市七分	確認調査 630 (対象面積12,070)	5/27~6/1 12/9~12/10	七分・壹口遺跡と命名	
	NEJ-24	永見市加納	確認調査 1,026 (対象面積25,700)	5/24~6/4	加納谷内遺跡と命名	
	NEJ-25	永見市福留	確認調査 630 (対象面積9,800)	12/6~12/9	福留天版遺跡と命名	
	NEJ-27	永見市宇波	確認調査 864 (対象面積18,000)	11/29~12/8	宇波西遺跡と命名	
	NEJ-29	永見市宇波	確認調査 675 (対象面積13,000)	11/29~12/3	道跡なし	

第1表 既往の調査一覧

2 調査経過

(1) 調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては国家座標を用い、堂前遺跡では+86,650, -16,360を、板屋谷内B・C古墳群では+85,350, -16,450をそれぞれX 0 Y 0とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。グリッドは2m方眼とし、各グリッド名は北東角のX軸とY軸の座標とした。発掘範囲は堂前遺跡はX 0~22, Y 0~25、板屋谷内B・C古墳群はX 17~136, Y 14~111である。板屋谷内B・C古墳群では、X 27~30付近の尾根に直交するトレンチをもってB, Cの古墳群に分けている。

調査は表土・耕作土・無遺物層の除去、包含層の発掘、遺構確認面の精査・遺構の検出、遺構の発掘、遺構の記録、写真撮影、空中写真測量、補足作業の順で行った。

堂前遺跡では、表土・耕作土・無遺物層の除去は、人力掘削による調査の事前準備として、調査員立ち会いのもと、確認調査の結果をふまえて基本層序を確認しながらバックホウにより行った。包含層の発掘はスコップ等を用い、人力で行った。排土はベルトコンベヤーを使用し、路線敷内の調査区隣接地に集積し、ダンプで調査区外へ搬出した。遺構確認面の精査・遺構の検出は、ジョンやねじり鎌で精査し、検出した遺構はスプレーベンキ等でマーキングを行い概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが、遺構の種類に関わらず通し番号とした。また、概略図には遺構上面の埋土色を記入し、検討の材料とした。遺構の発掘は、柱穴や土坑は半截または十字、溝は適宜に間隔をあけてセクションベルトを残し、移植ゴテで発掘した。

板屋谷内B・C古墳群においては、遺跡の性格から表土除去はすべて人力で行うものとし、B・C古墳群間の尾根部については、一部重機により伐根を行った。排土はベルトコンベヤーを使用し、調査区内に設けたパイロット道路に集積し、クローラーダンプで路線敷内の調査区隣接地に運搬した。表土除去及び遺構の検出にあたっては、尾根筋及び墳頂部にセクションベルトを残し、土層を観察しながら掘りさげた。また、墳丘の規模・形状、周溝の有無等の確認のため適宜トレントを設定した。墳頂部の調査は、埋葬施設の遺存を考慮して1m方眼の小地区を設定し慎重に行った。墳頂部の盛土は小地区毎に袋詰めし、C 6号墳については表土もすべて土壤洗浄を行った。

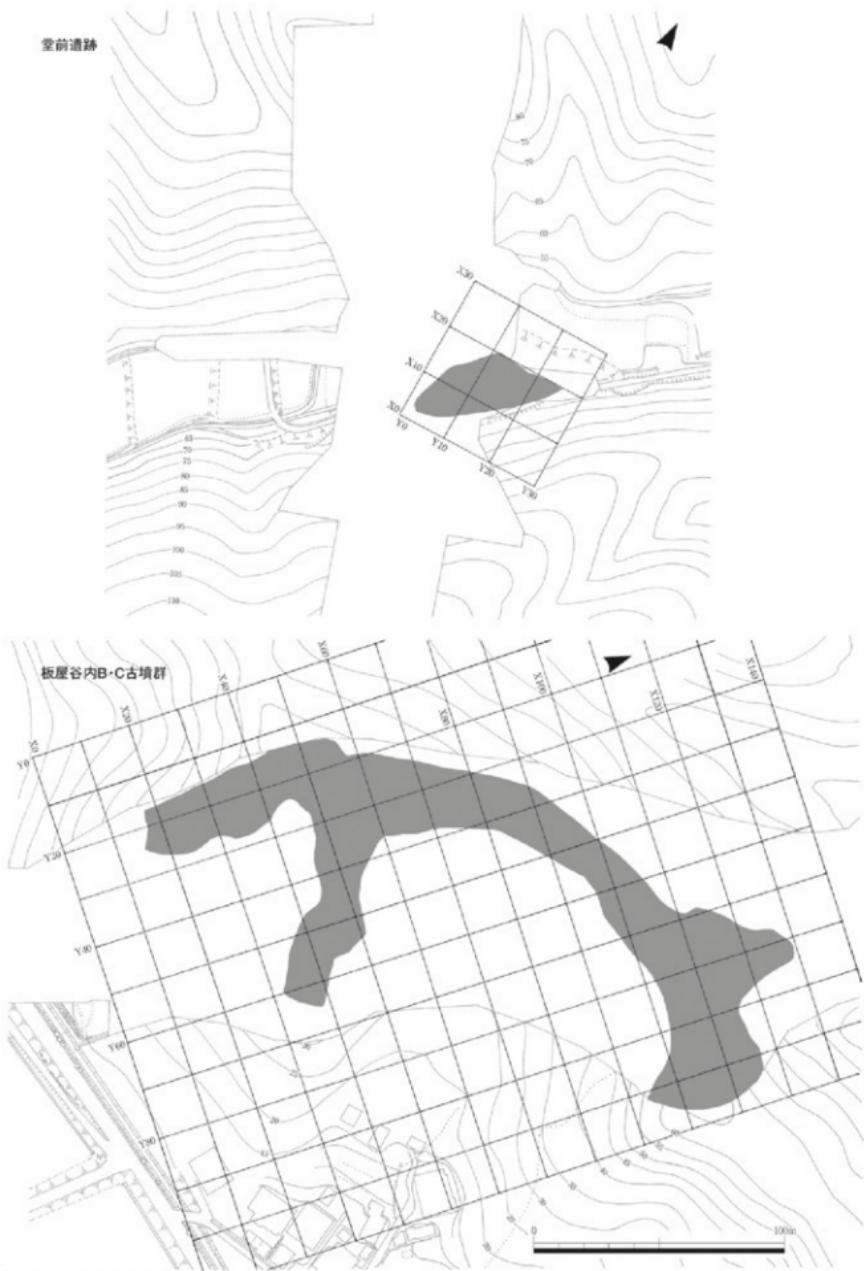
遺構の記録は、堂前遺跡、板屋谷内B・C古墳群ともに断面図を20分の1で実測し、遺構によっては10分の1の遺物出土状況図を作成した。また、板屋谷内C古墳群・C 6号墳においては玉類の出土位置をトータルステーションによって測量した。各遺構の断面及びトレント壁面は35mmカメラで、遺物の出土状況や個別の完掘状態、プロック写真はブローニー判・4×5インチ判もあわせて撮影した。調査区の全景写真、各古墳の現況・完掘状態は35mmカメラ・ブローニー判・4×5インチ判カメラで2方向以上から撮影している。フィルムは、35mmはカラーと白黒、ブローニー判・4×5インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し、面積によってラジコンヘリ又は実機ヘリコプターを使用した。空中写真測量後は残した畦等をはずし、遺構を完掘した。板屋谷内B・C古墳群においては、調査の最終段階に人力・重機により墳丘の断割を行い盛土の再確認及び地山層の把握に努めた。

(2) 調査の経過

調査は平成13年度、平成16年度に行なった。平成13年度の調査は岩坪岡田島遺跡・堂前遺跡を対象に調査員3名2班体制で行った。堂前遺跡は、平成13年度に確認調査を実施して確認された新出の遺跡



第2図 調査区位置図 (1/10,000)



第3図 調査地区区割図 (1/2,000)

で、本調査も併せて実施した。遺構検出面は古代と縄文の2面に分かれており、古代面の調査終了後、縄文面の調査に入った。なお、調査区東端と中央部の一部は削平を受けており、表土直下が縄文の遺構面・遺物包含層となっていた。調査総面積は1,668m²、調査期間は10月22日～12月11日である。平成16年度の調査は板屋谷内B・C古墳群・上久津呂中屋遺跡・中谷内遺跡・中尾新保谷内遺跡・大野江淵遺跡を対象に調査員17名9班体制で行った。板屋谷内B・C古墳群では確認調査で方墳1基、円墳5基を確認していたが、後世の開墾等による旧地形の改変が著しかったため、削平された古墳及び他の時代の遺構検出を目的とし、尾根部全面の調査を実施した。その結果、新たに方墳1基を確認し、計7基の古墳の調査を行った。調査総面積は8,882m²（B古墳群4,465m²、C古墳群4,417m²）、調査期間は6月7日～12月16日である。

遺跡		調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
宝前遺跡	上層	平成13年10月22日～11月12日	13日	834m ²	越前 憲子 町田 賢一 田中 昌樹	楕円柱建物	帆立貝殻、土器器、金銅製品
	下層	平成13年11月13日～12月11日	19日	834m ²		溝 土器集中堆积	縄文土器
板屋谷内B古墳群				4,465m ²	菅田 眞 金三津道子 移山 大吾	円墳2 土坑 石器（尾根）	帆立貝殻、土器器、縄文土器、金銅製品
板屋谷内C古墳群		平成16年6月7日～12月16日	108日	4,417m ²	西川 風野	円墳3 方墳2	帆立貝殻、土器器、縄文土器、金銅製品、玉類

第2表 調査一覧

(3) 調査体制

堂前遺跡 平成13（2001）年度

総括 桃野真晃 埋蔵文化財調査事務所所長
 肥田啓章 埋蔵文化財調査事務所副所長
 上野 章 埋蔵文化財調査事務所副所長
 庁務 竹中慎一 埋蔵文化財調査事務所総務課長補佐
 江本裕一 埋蔵文化財調査事務所主事
 朝田信之 埋蔵文化財調査事務所嘱託

調査総括 酒井重洋 埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
 調査員 越前憲子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
 町田賢一 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
 田中昌樹 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
 板屋谷内B・C古墳群 平成16（2004）年度

総括 桃野真晃 埋蔵文化財調査事務所所長
 関清 埋蔵文化財調査事務所主査・副所長
 盛田世津子 埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
 庁務 竹中慎一 埋蔵文化財調査事務所総務課長補佐
 廣田英貴 埋蔵文化財調査事務所主任
 岩田扶紀 埋蔵文化財調査事務所主任
 田島孫昭 埋蔵文化財調査事務所嘱託

調査総括 犬野 瞳 埋蔵文化財調査事務所調査第一課長

調査員 菅田 篤 埋蔵文化財調査事務所主任

金三津道子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

杉山 大晋 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

西川 麻野 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

(4) 現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために、年に1回、調査工程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。なお、平成13年度は岩坪岡田島遺跡を対象地区として行われており、堂前遺跡では実施していない。平成16年度は板屋谷内B・C古墳群において実施している。

平成16（2004）年

10月25日 開催案内

11月4日 新聞掲載

11月6日 板屋谷内B・C古墳群を公開した。古墳群が丘陵上に立地しており、急斜面が多く危険な箇所も多いため、尾根筋に位置する3基の円墳を対象とした。現地までの登山路には常時係員を置き、安全対策を考慮した見学順路を設定した。現地が狭いため、丘陵下の現場事務所前で資料を配付し全体説明を行った後、20名程度の班に分かれて係員の誘導のもと見学した。各古墳には調査員を置き、概要を説明するとともに質問等に対応した。約300名の見学者が訪れ、古墳調査への関心の高さが伺われた。また、現場事務所では写真パネルや鏡・玉・鉄刀等の出土遺物の展示・解説コーナーを設置した。



(5) 整理の経過

出土遺物は各調査年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。石製品・金属製品はメモ写真を撮影し、整理台帳を作成した。調査概要については『埋蔵文化財年報』、『埋蔵文化財調査概要』（平成13年度・平成16年度）として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は、平成17年4月に開始した。17年度は遺物実測・写真撮影、18年度に挿図作成・図版作成・原稿執筆・編集、19年度に印刷・校正を行った。

遺物の実測は土器を調査員が行い、石製品・金属製品については業者委託による写真実測を行った。実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構の実測図・写真・航空測量図は各台帳を作成して整理し、遺構カードとともにパソコンコンピュータを使用してデータ入力した。挿図にある遺構・遺物のデータは、観察表として掲載した。データ入力は人材派遣会社に委託し、調査員・整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は業者委託し、4×5インチ判を基本に白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には密着焼付または引き伸ばしたものを使用した。遺構写真・遺物写真のうち重要なものは

フォトCD化して保存した。

自然科学分析は掌前遺跡の鉄斧と板屋谷内B・C古墳群の確認調査において出土した鏡・鉄刀の分析を平成16年度に行い、板屋谷内B・C古墳群の本調査で出土した金属製品・ガラス玉・琥珀玉の分析を平成17・18年度に各々専門機関に委託して行い、結果報告を掲載した。

金属製品及び琥珀玉については、平成17・18年度に専門機関に委託して保存処理を行った。

(6) 整理体制

平成17（2005）年度

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	閔 清	埋蔵文化財調査事務所主査・副所長
	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
庶務	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所総務課長補佐
	岩田扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	宮田進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
担当	越前慎子	埋蔵文化財調査事務所主任
	高柳由紀子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	町田尚美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成18（2006）年度

総括	岸本 雅敏	埋蔵文化財調査事務所所長
	山本 正敏	埋蔵文化財調査事務所主査・副所長
	加藤豊次郎	埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
庶務	浅地 正代	埋蔵文化財調査事務所総務課チーフ
	岩田扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	宮田進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
担当	越前慎子	埋蔵文化財調査事務所主任
	金三津道子	埋蔵文化財調査事務所主任
	朝田亜紀子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成19（2007）年度

総括	岸本 雅敏	埋蔵文化財調査事務所所長
	山本 正敏	埋蔵文化財調査事務所主査・副所長
	加藤豊次郎	埋蔵文化財調査事務所副所長・総務課長
庶務	浅地 正代	埋蔵文化財調査事務所総務課チーフ
	岩田扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	河西 健二	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
担当	越前慎子	埋蔵文化財調査事務所主任
	金三津道子	埋蔵文化財調査事務所主任
	新宅 茂	埋蔵文化財調査事務所主任

第Ⅱ章 立地と歴史的環境

1 立地

富山県は本州のはば中央に位置し、東を北アルプスに、西を両白山地及び西部丘陵に、南を飛騨高地に囲まれ、北は富山湾に面している。飛騨高原山地から北側に接して連なる音川山地、呉羽丘陵は県中央部に突出し、東部の複合扇状地平野（狹義の富山平野）と、西部の砺波平野に二分している。砺波平野の北半は庄川新扇状地を形成し、面積約146km²で日本の沖積扇状地の中でも最大級の面積を誇る。扇状地上には庄川の旧河道が放射状に残っている。これに対して小矢部川流域の平野は、庄川新扇状地の発達に押されて狭い低地となっており、小矢部川は丘陵裾を蛇行しながら北流する。

高岡市は県西部に位置し、西は氷見市、南は小矢部市・砺波市、東は射水市に接している。市域の北西部は石川県の宝達山より派生する丘陵地や二上山周辺の丘陵地が連なるが、大部分は庄川及び小矢部川により形成された沖積平野で、庄川扇状地の先端部及び庄川・小矢部川の形成した三角州と氾濫原が占める。北西部に広がる丘陵地は通称西山丘陵と呼ばれる。西山丘陵は標高約200m前後を測り、北東側は海老坂の断層を経て二上丘陵に連なり、南西側は砺波山丘陵と接している。丘陵には樹枝状の開析谷が発達し、谷内には集落が点在し棚状の水田が営まれている。

板屋谷内B・C古墳群は高岡市板屋地内、堂前遺跡は高岡市西海老坂地内に所在する。板屋谷内B・C古墳群は西山丘陵の一角に位置し、板屋集落の背後に延びた尾根筋及び平野側に分岐した支丘上に連なり、蛇行する小矢部川と肥沃な平野を一望する。堂前遺跡は板屋谷内B・C古墳群の北側約1kmの丘陵に細長く入り込んだ谷内に位置する。遺跡周辺は北側の山裾に小川が流れおり、この小川に向かって緩やかに傾斜する地形となっている。

2 歴史的環境

板屋谷内B・C古墳群、堂前遺跡の所在する西山丘陵周辺は数多くの遺跡が分布することが知られている。ここでは、時代をおって主な遺跡について紹介していく。

縄文時代の遺跡は少なく、堂前遺跡（1）、頭川オスキノ原遺跡（19）、頭川宮中遺跡（20）、滻ヶ谷内I遺跡（35）、岩坪岡田島遺跡（39）等があり、いずれも頭川川の開析谷及び、谷の開口部に位置している。頭川オスキノ原遺跡、頭川宮中遺跡は中期、滻ヶ谷内I遺跡では晩期中葉の遺物が採取されている。岩坪岡田島遺跡は能越自動車道建設に伴い平成12年から3年間にわたり調査が行われ、前期後葉から末葉にかけての遺物が包含層や自然流路から出土している。縄文時代の明確な遺構は確認されていないが、周囲に集落が存在したことが伺える。

弥生時代は平野部で遺跡が確認されるようになり、小矢部川右岸では上流から福田・佐野・波岡・開発・江尻等で遺物が採取されている。いずれの地点も川沿いの微高地縁辺に立地しており、波岡北遺跡（53）、波岡東遺跡（56）は波岡集落の乗る低位段丘縁辺に位置している。小矢部川左岸では間戸遺跡（38）、月野谷千草遺跡（48）、宮田遺跡（51）等があり、間戸遺跡は昭和49年に上野章氏が『大境』で「頭川遺跡」として紹介した遺跡と同一遺跡で、東日本を中心とする「天王山式土器」と西日本を中心とする「櫛描文土器」とが併出することで知られている。

古墳時代は丘陵部に古墳時代前期から終末期に至る各時期の古墳・横穴墓が確認されている。西山

丘陵及び能登半島付け根東側の高岡市北西部及び氷見市域は県内唯一の古墳分布地域で、123の古墳群と19の横穴墓群が点在する。これらの古墳群は、丘陵部に入り込んだ谷の浸食により形成された舌状の支丘の先端及び尾根筋に立地している。板屋谷内B古墳群（2）、同C古墳群（3）のある丘陵端部には板屋谷内A古墳群（29）があり、板屋谷内古墳群の半径1km圏内には五十里横穴墓（22）、五十里道神社古墳群（24）、五十里古墳群（25）、須田不動谷内古墳群（27）等の古墳群が点在する。また、板屋谷内古墳群の南西約1.7kmには23基からなる頭川城ヶ平横穴墓（33）がある。同時期の集落遺跡には堀田ワタリウエ遺跡（11）、五十里沼田遺跡（21）、須田藤の木遺跡（30）、間尽遺跡（38）等がある。堀田ワタリウエ遺跡は、堀田館ノ山古墳のある丘陵下の谷内に位置しており、堀田館ノ山古墳と関係をもつであろう。また、五十里沼田遺跡は、板屋谷内古墳群の北側に入り込む細長い谷内に位置しており、板屋谷内古墳群との関係が考えられている。

古代では須田藤の木遺跡（30）、間尽遺跡（38）、岩坪岡田島遺跡（39）等がある。小矢部川左岸には「延喜式」に記載されている古代北陸道が丘陵裾沿いに高岡市伏木の越中国府方面へ通じていたとされ、「正倉院藏東大寺開田図」にある射水郡須加庄は高岡市国吉地内の岩坪付近から須田藤の木遺跡にかけての一帯で比定地論が展開されている。また、間尽遺跡からは布目瓦や「梗令分」と記された墨書き器が出土し、7世紀末の古代寺院、窯跡、莊園等との関係が示唆されている。

中世では、丘陵部に城館（山城）や寺院、平野部に集落が立地する。城館では飯久保城跡（5）、神代城跡（9）、堀田城跡（10）、蒲田A遺跡（17）、安居山城跡（37）等があり、寺院では正保寺遺跡（4）、神代テラヤシキ遺跡（18）等がある。集落では間尽遺跡（38）、岩坪岡田島遺跡（39）、手洗野赤浦遺跡（40）等がある。岩坪岡田島遺跡は12~14世紀の集落遺跡で、天正地震（1586年）による地割れ跡も検出されている。手洗野赤浦遺跡は岩坪岡田島遺跡の南西約500mに位置する遺跡で、溝で区画された建物や井戸等が検出された14~15世紀代の集落遺跡である。岩坪・手洗野一帯は中世には「国吉名」・「岩坪保」が置かれ、古くから交通の要衝として位置してきた。手洗野には、越中最古の曹洞宗寺院である国上山信光寺が元亨3（1323）年に創建され、この地域の中心的役割を担っていたものと想定されている。

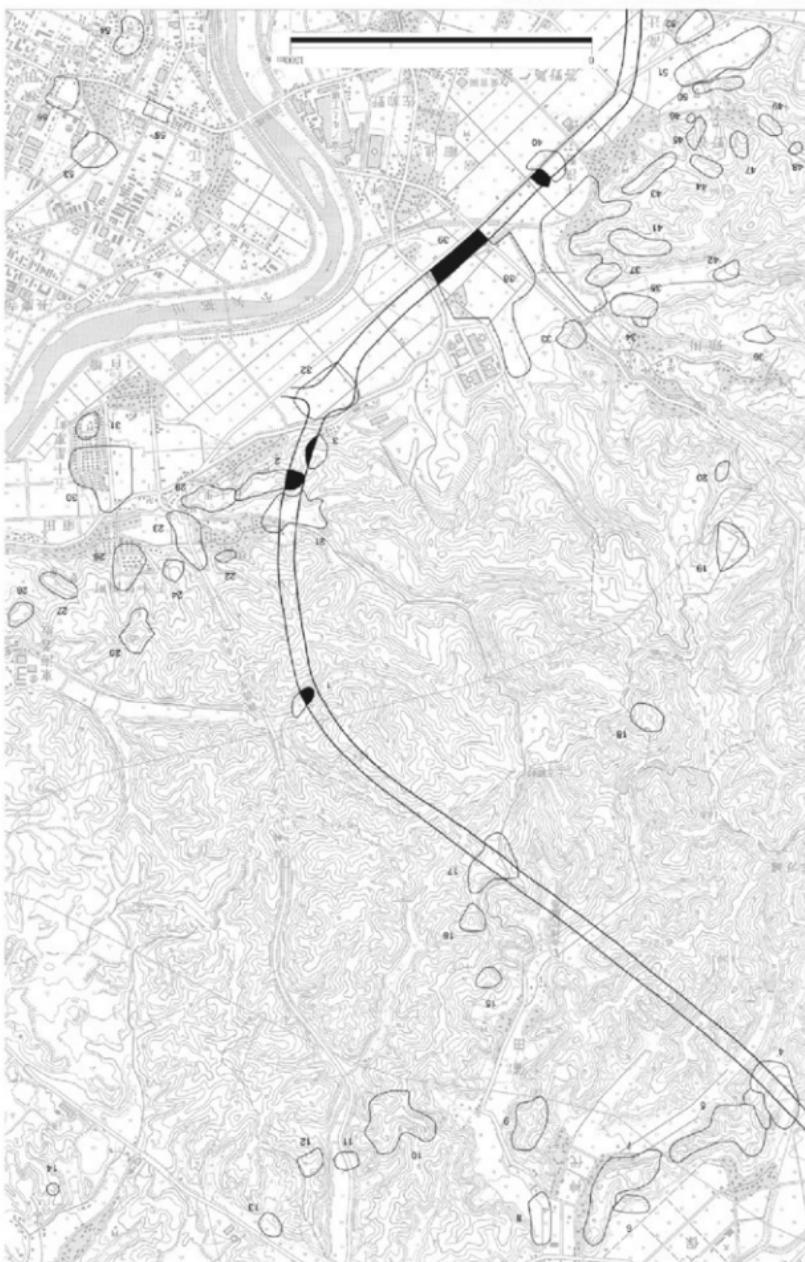
近世の遺跡は少ないが、岩坪岡田島遺跡（39）、手洗野赤浦遺跡（40）では安政5（1858）年の飛越地震によると考えられる大規模な噴砂が検出されている。また近世に至っても小矢部川左岸の岩坪・手洗野一帯には北陸街道の脇往還として石動と高岡、氷見を結ぶ氷見街道が通り、岩坪の南に位置する佐加野地区には「佐加野駅」が置かれるなど交通の要衝として栄えていた。このことは佐加野に藩の御蔵や高札場が置かれ、小矢部川の舟運が利用されて、岩坪に「岩坪渡」が置かれたことからも伺える。

（金三津道子）

参考文献

- 国吉小史刊行委員会 1966『国吉小史』
- 高岡市史編纂委員会 1959『高岡市史 上巻』
- 氷見市史編纂委員会 2002『氷見市史7 資料編五 考古』

第四圖 圖22測驗位置圖 (1/25,000)



No.	遺跡名	所在地	時期	時期	文獻
1	京畿遺跡	高岡市五十里	集落	縄文・古代	45
2	板岡谷内古墳群	高岡市板屋	古墳	古墳	67.11
3	板岡谷内古墳群	高岡市板屋	古墳	古墳	67.11
4	甘利守道跡	水見市飯久保字正醍寺	中世(寺社)	中世(鎌倉・室町)	28
5	飯久保城跡	水見市飯久保字向田	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	28~30
6	飯久保山メド遺跡	水見市飯久保	散布地	古代(奈良)	28.29
7	元興寺山古墳群	水見市神代	古墳	古墳	28.29.31
8	矢ヶ原一丁目遺跡	水見市矢ヶ原	散布地	鶴生・古墳	28.29
9	仲代城跡	水見市神代ノ山	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	28.29
10	猪口城跡	水見市猪口	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	28.29
11	猪口ワタリウエ道跡	水見市猪口字ワタリウエ	散布地	古墳・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)	28.29
12	猪口断ノ山古墳	水見市猪口	古墳	古墳	27.29.31
13	猪口ガヌ山古墳	水見市猪口	不明	不明	27
14	上日吉古墳	水見市上日吉	古墳	古墳	29.31
15	蒲田畠道跡	水見市蒲田	散布地	中世(鎌倉・室町)	
16	猪口長尾遺跡	水見市猪口	墓	中世(鎌倉・室町)	28
17	蒲田八道跡	水見市蒲田	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	28
18	荷代テヤシキ道跡	水見市荷代	寺社(寺院)	中世(鎌倉・室町)	29
19	御川オスキノ原道跡	高岡市御川字オスキノ原	散布地	國文(中)	13
20	御川宮中道跡	高岡市御川字宮中	散布地	國文(中)	13
21	五丁里沼田遺跡	高岡市五十里	集落	古墳	5
22	五丁里植穴墓	高岡市五十里	古墳(植穴)	古墳	
23	五丁里西道跡	高岡市五十里	散布地	國文・古代(奈良・平安)・中世	13.22
24	五丁里道神社古墳群	高岡市五十里道重	古墳・墓	古墳・中世(鎌倉・室町)	11.13
25	五丁里古墳群	高岡市五十里	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	11.13
26	五丁里道重遺跡	高岡市五十里西町	散布地	古代(奈良・平安)	13
27	猪口不動谷内古墳群	高岡市猪口	古墳	古墳	11.26
28	西湖老坂小田谷内古墳群	高岡市西湖老坂	古墳	古墳	11
29	板岡谷内古墳群	高岡市板屋	古墳	古墳	11.25.26
30	猪口の木造跡	高岡市五十里東町	集落	古墳・古代(奈良)	13.16~18
31	白情宮山道跡	高岡市五十里東町	散布地	國文(晩)	13
32	N.E.J.-12遺跡	高岡市五十里	散布地	古代・中世・近世	2
33	猪口城平横穴墓	高岡市猪坪	古墳(横穴)	古墳	9.30.21
34	御川古墓跡	高岡市御川	墓	不明	
35	猪口谷内I遺跡	高岡市猪口	散布地	國文・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)	12
36	明田I遺跡	高岡市明田	散布地	鶴生(後)	
37	安原町古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12
38	安原町城跡	高岡市手洗野	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	
39	岩屋岡田鳥走跡	高岡市岩屋坪	集落	鶴生・古墳(飛鳥・白鳳)・古代(奈良・平安)・中世	12.14.19
40	手洗野赤塚遺跡	高岡市手洗野	集落	中世(鎌倉・室町)	1.2.8
41	四十九古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12
42	猪口谷内II遺跡	高岡市手洗野	散布地	古代(奈良・平安?)	12
43	倉谷古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12.23
44	道ノ谷内古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12
45	道ノ谷内I古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12
46	道ノ谷内II古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12
47	道ノ谷内古墳群	高岡市手洗野	古墳	古墳	12
48	月野谷草薙跡	高岡市月野谷	散布地	鶴生	12
49	月野谷大谷内遺跡	高岡市月野谷字大谷内	散布地	古墳?	12
50	立古墳群	高岡市月野谷	古墳	古墳	12
51	月野道跡	高岡市月野谷	散布地	鶴生・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)	12
52	高辻遺跡	高岡市高辻	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)	12
53	波切北道跡	高岡市波切	長慶寺	鶴生・古墳・古代・中世・近世	15.16
54	波切南道跡	高岡市波切	散布地	古代・中世	15.16
55	波切西道跡	高岡市波切	散布地	古墳(後・飛鳥・白鳳)・古代・中世	15.16
56	波切東道跡	高岡市波切	散布地	鶴生・古墳・古代・中世・近世	15.16

第3表 周辺遺跡一覧

文献

1. 財團法人富山県文化振興財團 1999 「能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告—N E J - 10 N E J - 11—」
2. 財團法人富山県文化振興財團 2000 「埋蔵文化財調査概要—平成11年度—」
3. 財團法人富山県文化振興財團 2001 「埋蔵文化財調査概要—平成12年度—」
4. 財團法人富山県文化振興財團 2002 「埋蔵文化財調査概要—平成13年度—」
5. 財團法人富山県文化振興財團 2002 「能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告
—N E J - 13 N E J - 14 N E J - 20 N E J - 21
中尾坊田遺跡 中尾新保谷内遺跡—」
6. 財團法人富山県文化振興財團 2004 「能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告
—N E J - 19 板屋谷内B古墳群 板屋谷内C古墳群—」
7. 財團法人富山県文化振興財團 2005 「埋蔵文化財調査概要—平成16年度—」
8. 財團法人富山県文化振興財團 2007 「岩坪岡田鳥遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道道路発掘調査報告
富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第35集」
9. 高岡市教育委員会 1983 「富山県高岡市頃川城ヶ平横穴墓群第1次緊急発掘調査概要」
10. 高岡市教育委員会 1984 「富山県高岡市頃川城ヶ平横穴墓群第2次発掘調査報告」
11. 高岡市教育委員会 1984 「西山丘陵埋蔵文化財分布調査概要Ⅰ」
12. 高岡市教育委員会 1985 「西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ」
13. 高岡市教育委員会 1988 「西山丘陵埋蔵文化財調査概報V」
14. 高岡市教育委員会 1993 「市内遺跡調査概報II」
15. 高岡市教育委員会 1996 「高岡市埋蔵文化財分布調査概報VI」
16. 高岡市教育委員会 1997 「市内遺跡調査概報VI」
17. 高岡市教育委員会 1998 「市内遺跡調査概報 平成9年度麻生谷新生園遺跡の調査他」
18. 高岡市教育委員会 2000 「須田藤の木遺跡調査報告」
19. 高岡市教育委員会 2000 「問戸遺跡調査報告」
20. 高岡市教育委員会 2000 「市内遺跡調査概報X」
21. 高岡市教育委員会 2001 「頃川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ」
22. 高岡市教育委員会 2001 「市内遺跡調査概報XⅠ」
23. 高岡市教育委員会 2002 「金谷古墳群調査報告」
24. 高岡市教育委員会 2004 「市内遺跡調査概報XⅣ」
25. 富山県教育委員会 1982 「昭和56年度富山県埋蔵文化財調査一覧」
26. 富山考古学会 1999 「富山平野の出現期古墳」
27. 水見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1994 「水見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ」
28. 水見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1996 「水見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ」
29. 水見市史編さん委員会 2002 「水見市史7資料編五 考古」 水見市
30. 水見市教育委員会 2003 「観久保城跡」
31. 水見市教育委員会 2003 「水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅲ」



第5図 古墳分布図 (1/100,000)

No.	遺跡名	種類	所在地	No.	遺跡名	種類	所在地
1	熊野神社古墳群	古墳	水見市宇波吉田	72	船田ナツマイヤ松古墳群	古墳	水見市船田字藤原
2	宇波安寄寺古墳群	古墳	水見市宇波	73	船田山古墳群	古墳	水見市船田
3	鹽方古墳群	古墳	水見市鹽方	74	上田子古墳群	古墳	水見市上田子
4	鹽方三塚古墳群	古墳	水見市鹽方・小瀬	75	大浦三塚古墳群	古墳	水見市大浦
5	鹽方橫穴墓群	横穴墓	水見市鹽方字井田	76	鶴田布施山古墳	古墳	水見市鶴田
6	平瀬古墳群	古墳	水見市宇波柳枝境内	77	櫻谷古墳群	古墳	高岡市丰田字櫻谷
7	萩原妻御造古墳	横穴墓	水見市萩原字妻御	78	岩崎古墳群	古墳	高岡市洪田字岩崎
8	阿尼瀬ノ谷内横穴墓群	横穴墓	水見市阿尾瀬ノ谷内	79	因房山古墳群	古墳	高岡市伏木因房字因房
9	阿尾瀬山古墳群	横穴墓	水見市阿尾	80	古眉山古墳群	古墳	高岡市伏木久田上原
10	阿尾山古墳群	古墳	水見市阿尾	81	矢上野古墳群	古墳	高岡市高美町字上野
11	稻草字ナツマイヤ古墳群	古墳	水見市稻草	82	東上野古墳群	古墳	高岡市城東寺
12	稻草字ロ古墳群	古墳	水見市稻草	83	東上野1号古墳群	古墳	高岡市城光寺
13	稻草山鈴古墳群	古墳	水見市稻草	84	寺山古墳群	古墳	高岡市城光寺
14	稻嶋山古墳群	古墳	水見市稻嶋字山由	85	城光寺古墳群	古墳	高岡市城光寺
15	稻嶋大谷古墳群	古墳	水見市稻嶋	86	城光寺2号古墳群	古墳	高岡市城光寺
16	余川谷金古墳群	古墳	水見市余川	87	院内古墳群	古墳	高岡市院内町
17	余川田畠古墳群	古墳	水見市余川	88	鳥嶺古墳群	古墳	高岡市二上
18	加納難子山古墳群	古墳	水見市加納難子山	89	谷内古墳群	古墳	高岡市二上
19	加納難穴古墳群	横穴墓	水見市加納難子山	90	二上横穴墓群	横穴墓	高岡市二上
20	加納新池古墳群	古墳	水見市加納	91	二上内古墳群	古墳	高岡市二上
21	加納南(中程)古墳群	古墳	水見市加納	92	東湖養老山カイ古墳群	古墳	高岡市東湖養老
22	桃谷上谷山古墳群	古墳	水見市桃谷	93	東湖老坂ダム古墳群	古墳	高岡市東湖老坂
23	桃谷石谷1号古墳群	古墳	水見市桃谷	94	西湖老坂小田谷内古墳	古墳	高岡市西湖老坂
24	中村横穴墓群	横穴墓	水見市中村	95	頃田本谷内古墳群	古墳	高岡市頃田
25	中村葉屋古墳群	古墳	水見市中村字葉屋	96	五十古ノ谷古墳群	古墳	高岡市五十里
26	谷筋通山古墳群	古墳	水見市谷筋	97	五十里通山古墳群	古墳	高岡市五十里通重
27	中村天塩山古墳	古墳	水見市中村字天塩山	98	五十里横穴墓	横穴墓	高岡市五十里
28	谷屋新堂古墳	古墳	水見市谷屋	99	板屋谷内古墳群	古墳	高岡市板屋
29	新保城山古墳群	古墳	水見市新保	100	板屋谷内古墳群	古墳	高岡市板屋
30	新保古墳群	古墳	水見市新保	101	板屋谷内C古墳群	古墳	高岡市板屋
31	田辺山林古墳群	古墳	水見市田辺	102	頃田横穴墓	横穴墓	高岡市岩坪
32	田辺古墳群	古墳	水見市田辺	103	安原山古墳群	古墳	高岡市安原山
33	小久米古墳群	古墳	水見市小久米	104	四十九塚古墳群	古墳	高岡市手取野
34	日名田古墳群	古墳	水見市日名田	105	倉谷山古墳群	古墳	高岡市手取野
35	小久米古墳群	古墳	水見市小久米	106	道ノ谷内古墳群	古墳	高岡市手取野
36	久目梨谷古墳群	古墳	水見市久目	107	道ノ谷内古墳群	古墳	高岡市手取野
37	難波古墳群	古墳	水見市難波	108	道ノ谷内1号古墳群	古墳	高岡市手取野
38	難波清水古墳群	古墳	水見市久目	109	立山古墳群	古墳	高岡市立野谷
39	立谷山古墳	古墳	水見市立谷	110	帆越山古墳群	古墳	高岡市盤入
40	早借サツ古墳群	古墳	水見市早借	111	男傍ノ谷古墳群	古墳	高岡市磐丘1
41	速川神社古墳群	古墳	水見市早借・新保	112	荒丘1号古墳群	古墳	高岡市磐丘1
42	薪保横穴墓群	横穴墓	水見市薪保宇佐山	113	江道横穴墓群	横穴墓	高岡市道守高宮
43	イヨダノヤマ古墳群	古墳	水見市上田字上野・新保	114	柴野春日古墳群	古墳	高岡市柴野
44	上田西古墳	古墳	水見市上田	115	猪野1号古墳群	古墳	高岡市猪野
45	上田古墳群	古墳	水見市上田	116	柴野2号古墳群	古墳	高岡市柴野
46	中尾古墳群	古墳	水見市中尾	117	柴野1号新古墳群	古墳	高岡市柴野
47	往路古墳群	古墳	水見市京	118	柴野1号1号古墳群	古墳	高岡市柴野
48	氣谷内口古墳群	古墳	水見市京	119	麻生谷森内古墳群	古墳	高岡市麻生谷
49	中尾城古墳群	古墳	水見市中尾	120	石變山古墳群	古墳	高岡市石變
50	中尾脇山古墳群	古墳	水見市中尾	121	赤丸丸山神社古墳	古墳	高岡市相明町赤丸
51	中尾茅戸古墳群	古墳	水見市中尾	122	赤丸清水山古墳群	古墳	高岡市相明町赤丸
52	中尾神子野古墳群	古墳	水見市中尾	123	赤丸麻生古墳群	古墳	高岡市相明町赤丸
53	中尾雞足山古墳群	横穴墓	水見市中尾字寺尾	124	舞谷横穴墓群	横穴墓	高岡市相明町舞谷
54	中尾高塚古墳群	古墳	水見市中尾	125	舞谷ノコロ古墳群	古墳	高岡市相明町舞谷
55	西脇本古墳群	古墳	水見市西脇本	126	舞谷觀音堂古墳群	古墳	高岡市相明町舞谷
56	御津横穴墓群	横穴墓	水見市十二町字御津谷内	127	城ノ平横穴墓群	横穴墓	高岡市相明町字城ノ平
57	十二町ガリ山古墳	古墳	水見市十二町	128	馬場古墳群	古墳	高岡市相明町馬場
58	朝日野内古墳	横穴墓	水見市辛原	129	加茂古墳群	古墳	高岡市相明町加茂
59	朝日寺古墳群	古墳	水見市朝日本町	130	加茂横穴墓群	横穴墓	高岡市相明町加茂大字大平
60	朝日長山古墳	古墳	水見市朝日本町	131	上星古墳群	古墳	高岡市相明町上星
61	朝日城尾古墳	古墳	水見市朝日庄	132	下向田古墳群	古墳	高岡市相明町下向田
62	朝日御山古墳群	古墳	水見市朝日庄	133	SUD-01古跡	古跡	高岡市相明町西明寺
63	万尾古墳	古墳	水見市万尾	134	西明寺古墳群	古墳	高岡市相明町西明寺
64	下久津古墳	古墳	水見市下久津呂	135	上向田古墳群	古墳	高岡市相明町上向田
65	布施山古墳	古墳	水見市布施山	136	上五郎山古墳群	古墳	高岡市相明町上五郎
66	深原古墳群	古墳	水見市深原	137	平尾山古墳群	古墳	高岡市相明町上向田・上野
67	寺前久保古墳群	古墳	水見市飯久保	138	上野古墳群	古墳	高岡市相明町上向田・上野
68	憩翁古墳群	古墳	水見市憩翁字軒平	139	上向田1号古墳群	古墳	高岡市相明町上向田
69	憩翁コロナ古墳群	古墳	水見市憩翁	140	オゾノクモ古墳	古墳	小矢部市南川
70	光寺古山古墳群	古墳	水見市神代・飯久保	141	田川城跡跡横穴墓	横穴墓	小矢部市南川
71	履田二号山古墳群	古墳	水見市履田	142	田川古山横穴墓群	横穴墓	小矢部市南川

第4表 周辺古墳一覧

第Ⅲ章 板屋谷内B・C古墳群

1 遺跡の概要

(1) 概 要

板屋谷内古墳群は、小矢部川左岸の二上丘陵に連なる西山丘陵から派生した支丘上に位置する。この支丘の東端よりA～Dの4つの古墳群が尾根上に連なっている。調査区はB・C古墳群の一部を含む尾根全面で、調査面積は8,882m²である。尾根は北側に開析谷、南東側に蛇行する小矢部川と平野を望み、標高は33m～66mを測る。調査区内に所在するB古墳群2基、C古墳群5基の計7基の古墳の調査を実施し、各々B13号墳、B14号墳、C1号墳、C2号墳、C4号墳、C6号墳、C7号墳とした(第6図)。C6号墳においては、200を超える勾玉・管玉・簗玉などの豊富な玉類が出土したが、他の古墳においては、出土遺物は少ない。時期を特定できる遺物が少なく、決め手に欠けるが、概ね古墳群の時期は古墳時代前期中頃から中期後半にあたると考える。

(2) 過去の調査

古墳群の位置する西山地区一帯は多くの遺跡が確認されており、特に、板屋谷内古墳群は昭和52年に西井龍儀氏により詳細な踏査が行われている。昭和58年度には、高岡市教育委員会が、当該古墳群を含む西山地区の分布調査を実施しており、板屋谷内古墳群はA～Dの4群に分けられ、A古墳群5基、B古墳群15基、C古墳群5基、D古墳群2基の所在が報告されている。高岡市教育委員会の分布調査に先立ち、昭和56年度には、道路建設に伴い板屋谷内古墳群A1号墳において富山県教育委員会による試掘調査が実施され、工法をトンネルに変更して古墳の保存が図られている。

平成15年度には、能越自動車道の路線内にかかるB・C古墳群における包蔵地確認調査(以下、確認調査)を当財団が実施した。確認調査では、B古墳群で2基、C古墳群で3基の計5基の古墳を再確認し、C古墳群で新たに1基の古墳を推定した。なお、C古墳群は昭和52年・58年に行われた調査では、C4号墳の南側に径3mの小円墳(C5号墳)が確認されていたが、橋脚工事に伴い支丘先端部は既に削平され、C5号墳は消滅していた。このため、新規古墳をC6号墳とした。

なお、確認調査の報告において、B古墳群で確認した2基の古墳を周知の古墳のうち8号墳、10号墳に該当するものとしたが、本調査時に樹木等の伐採後、改めて踏査を行った結果、13号墳、14号墳であることを確認したため、平成16年度の概要において訂正した。

(3) 土 層

古墳群周辺の西山丘陵は、地殻変動により海底が隆起して生成された地形で、主に新生代第三紀層の砂岩・泥岩・凝灰岩が分布する。西山丘陵を含む県西部の西部丘陵では、基本的に地層の走向が北東方向で平野側あるいは富山湾側に傾斜している。古墳群周辺の地山は、褐色または黄褐色の砂質土層を基盤とし、泥岩層や砂・泥互層が堆積しているが、古墳群の基本層序は竹・葉を含む腐植土を主体とする表土以下は、各古墳で様相を異にしており、直接対応させることは困難である。

また、県西部の丘陵沿いには石動断層や海老坂断層などの活断層が北東方向に伸び、周囲では小断層もみられる。古墳群周辺はこの両活断層の切れ目にあたるが、各古墳の埴丘断面の観察では、小断層と考えられる土層のズレや切断箇所の他、地滑りや噴砂など地震による影響が認められた。

(金三津道子)

1 這跡の概要



第6図 板屋谷内B・C古墳群 全体図 (1/1,200)

2 遺構と遺物

(1) 板屋谷内B13号墳

B13号墳はC古墳群より北側の緩い尾根上、標高約61mの地点に立地している。東側はB古墳群のB12号墳からB1号墳へとつづいている。B古墳群では、B13号墳西側のB14号墳付近で最も標高が高く、B1号墳に向かうにつれ、緩やかに標高が下がる。調査は、確認調査時に設定した2本のL字状トレンチを基準に、東西南北の4地区を設定して行った。以下、特に断りのない限りこの地区名を用いて記述する。

墳丘（第7・8・10図、図版8～10）

全長約26mの円墳である。周溝はもたず、墳丘は地山削出しにより作られ、わずかに墳頂部に盛土を施す。墳丘の断面観察から地震による噴砂の痕跡が数多く認められ、古墳築造後の地震により墳丘の大部分が破壊されている状況である。東地区では、墳頂部の表土層以下5層が部分的に崩落した状態を確認した。北地区・西地区では、墳丘の土の多くを流失しており、地震による影響を少なからず受けているものと考えられる。東地区・南地区の墳頂部では、円磨化したチャート、もしくは珪質泥岩が多く、土質がもろい砂質なため、流失しやすい状況を呈している。

埋葬施設（SK1、第9図、図版9・10）

墳丘中央部に位置し、主軸はN-3°-Wである。確認トレンチにより切られているため全貌は不明であるが、長軸3.2m以上、短軸2.0m以上を測る隅丸長方形の墓坑に、長軸2.8m以上、短軸1.2m以上を測る木棺を直葬したものと推測される。木棺掘形及び土層断面の観察から木棺の形式は組合式木棺であると考えられる。墓坑の断面形態は一段墓坑である。副葬品はない。

出土遺物は、墓坑南東側の東地区表土から刀子片・袋状鉄斧・鉄刀片がまとめて出土し、やや離れて土師器が出土している。北地区では、土製の勾玉片が出土している。また、確認調査時に鉄刀及び須恵器高杯が出土しており、これらの出土位置関係などから検出した墓坑の南側にもう一基の埋葬施設の存在が想定された。このため、墳頂部にトレンチを設定して確認作業を行ったが、埋葬施設の存在は認められず、地震による墳頂部の崩落等により破壊された可能性が考えられる。

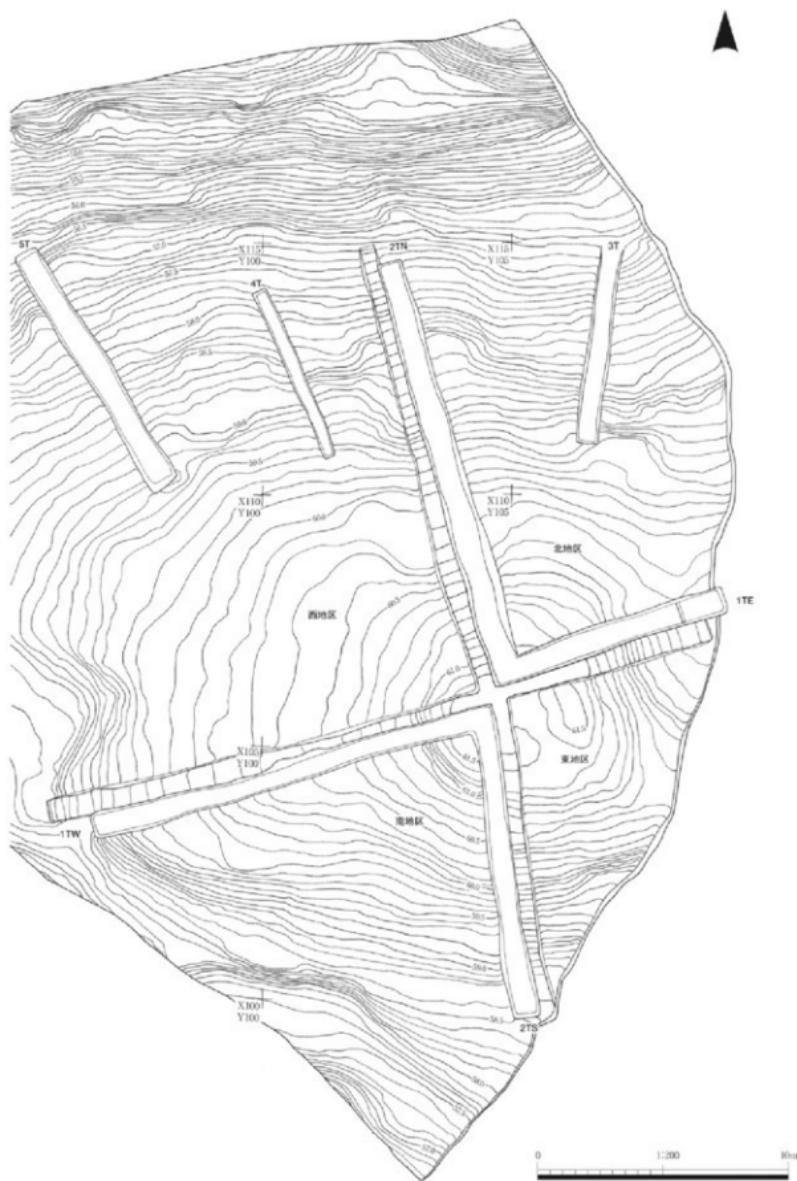
出土遺物（第11図、図版31・35・37・38・42～45）

遺物はすべて表土、または確認調査時の出土で、須恵器、土師器、刀子1点、鉄刀3点、鉄斧1点、板状鉄製品1点、土製勾玉1点がある。

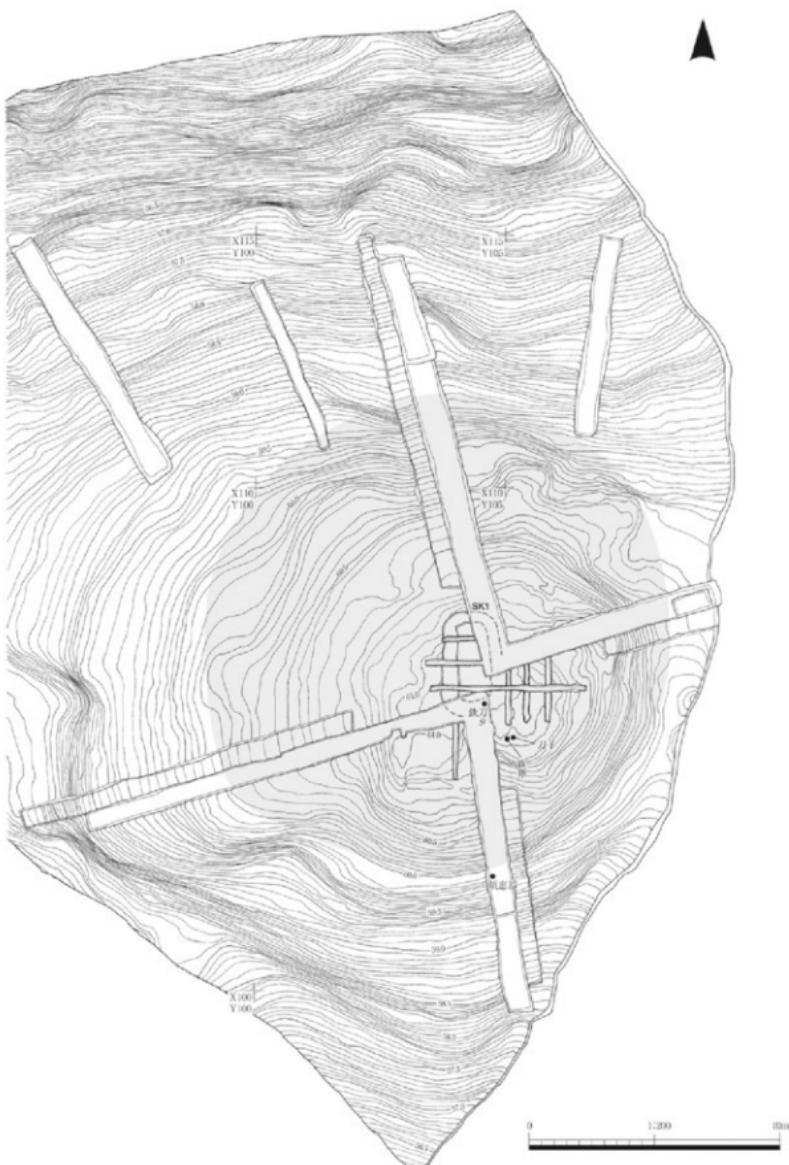
須恵器は、短脚4方透かしの高杯（1）で、脚部はほぼ全周し、杯部は底部のみ残存する。杯底部には欠損しているが、把手が1対つく。脚部の透かし孔は、大きく裾広がりの台形状を呈し、透かし孔の間に矢印状の刻みが施される。刻みは浅く、線内の色調はやや白色をおびる。透かし孔に伴う刻みは深く、線内の色調は灰褐色であるとの比較すると、矢印状の刻みは焼成後に施された可能性が高い。焼成後の刻みとすると、工人による窯記号のようなものではなく、器物の正面を示すものか、所有権を示す目印のようなものの可能性が考えられる。時期はTK208～TK23式期に比定できる。胎土分析の結果、陶邑産の製品を搬入した可能性が高い^①。

土師器は、壺底部（2）で遺存状態は悪いが、内外面ともにナデで、外面に赤彩が施される。

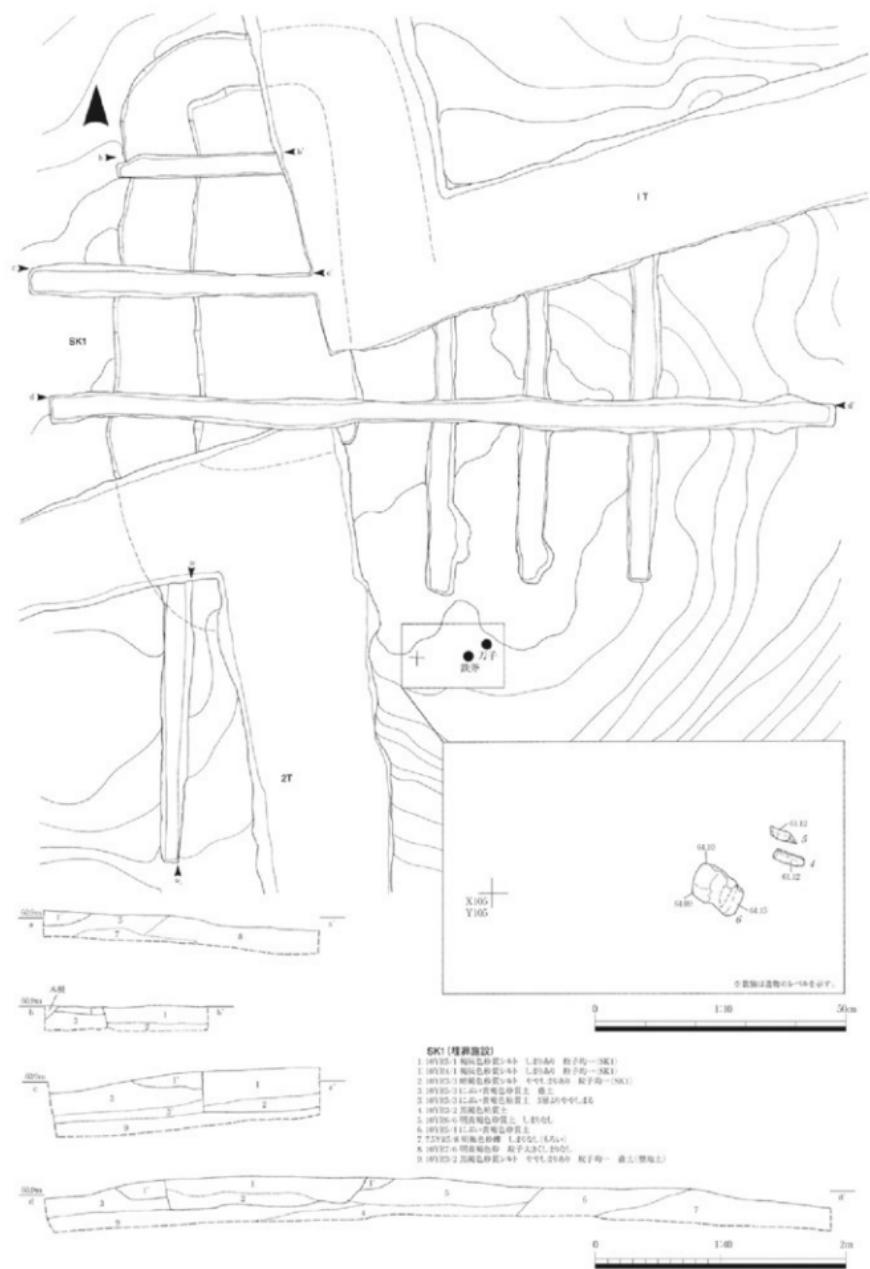
鉄刀は確認調査時に1点（9）、墳頂表土から2点（7・8）出土している。9は全長42.2cm、幅3.6cm、厚さ1.5cmを測る。腐食が著しく外装は不明であるが、関部の形状は斜関で、茎尻は一字茎尻である。茎の一部に木質が残る。平造りによる直刀である。抜身または、刀身状態で副葬されていた



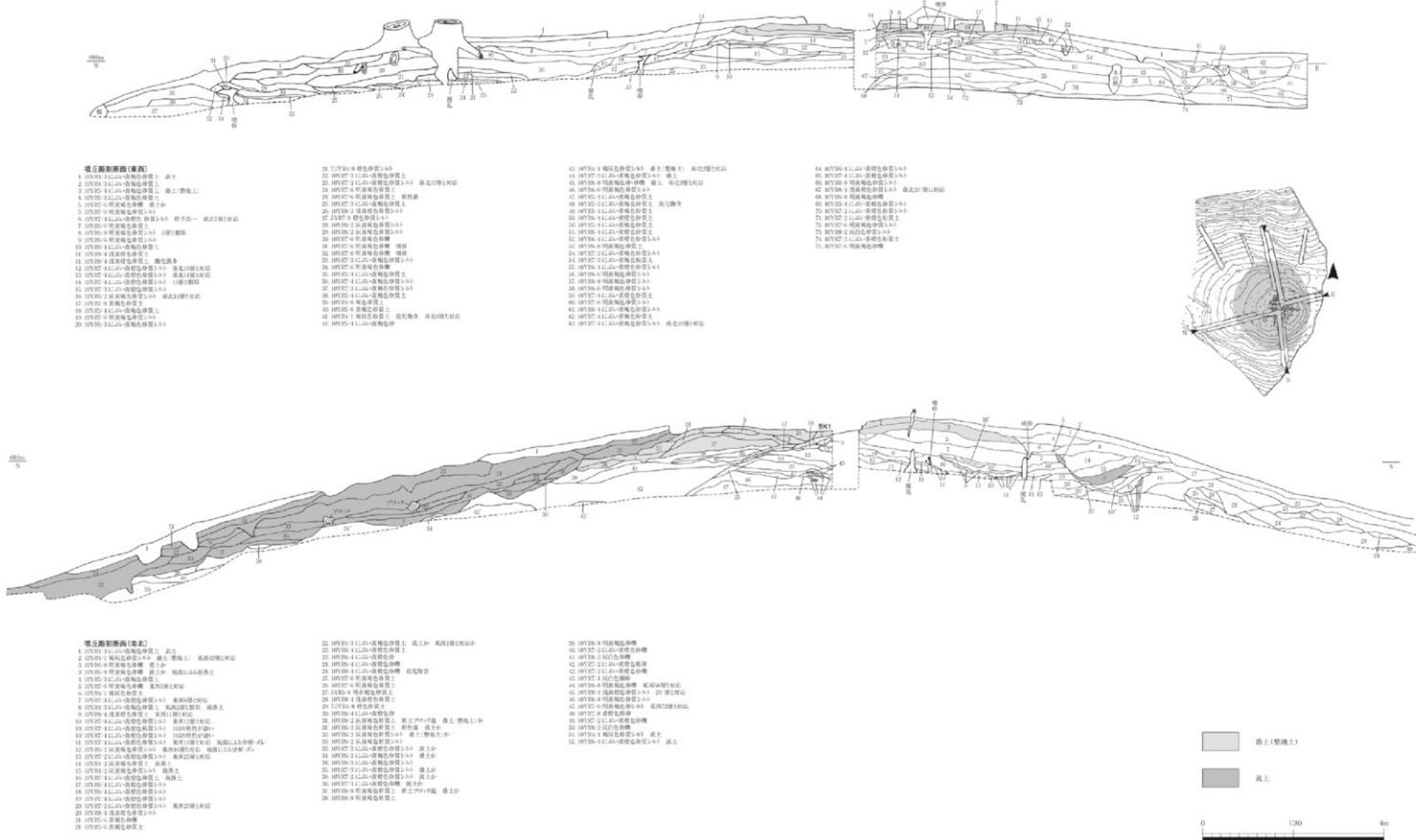
第7図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 (1/200)
B13号墳（表土除去後）



第8図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 (1/200)
B13号墳(完掘)



第9図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 (1/10, 1/40)
B13号墳 SK1・墳頂遺物出土状況



第10図 板屋谷内B・C古墳群 遺構実測図 (1/80)
B13号墳 墳丘断面

可能性が高い。8は残存長11.8cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmを測る鉄刀の破片である。腐食が著しく外装は不明であるが、芯金と皮金の3枚作りである。当初、7と同一個体と考えていたが、7は2枚合せの雑な作りであることから、別個体と考えられ、3振りの刀が副葬されていた可能性がある。

鉄斧（6）は上部を折り曲げて中空の袋部とし、下部に刃をつけた袋状鉄斧（有袋鉄斧）である。全長10.7cm、刃部幅6.6cm、厚さ2.7cm、重さ348.22gを測る。側縁は肉眼では明瞭に肩を形成せず、若干外湾気味に聞くよう見えるが、X線写真では明確に肩を確認できることから、有肩鉄斧であろう。X線写真によると部分的にメタル（金属）が残存するが、腐食は著しい。刃部はやや弧状に張り出す。袋部中央の合わせ目は、片方が2/3以上欠損しているが、残存部は隙間なく接合されており、本来は丁寧に接合されていたものと考えられる。柄の痕跡は確認できない。基部の断面形態は梢円形を呈し、側面形は裏面と袋部上面のラインが直角に交わり、表面のラインを斜辺とする直角三角形状を呈する。重量や側面形などから、柄と刃が垂直になるように装着した横斧と考えられる。古瀬清秀氏の分類^{注2}によれば有肩鉄斧A1類、野島永氏の分類^{注3}によればIIa類もしくはIVa類に該当し、板材などを平滑に削る手斧としての機能が想定される。時期^{注4}は他の出土遺物との関係等から5世紀中頃と考える。

刀子（4）は、鉄斧と近接した地点で出土した。残存長6.4cm、幅1.2cmを測る。両端が欠損しているが、小型の刀子の可能性が高い^{注5}。刀子としては、茎との間に段のないタイプと考えられ、5世紀半ば頃までの古いタイプであろう。同じ地点で詳細不明の板状鉄製品（5）が出土している。

土製勾玉（3）は、両端が欠損しており全形は不明であるが、おそらく「C」字形を呈する土製の勾玉片の可能性が考えられる。色調は全体に黄色味をおびており、琥珀製かと考えられたが、科学分析の結果は土製であった^{注6}。

古墳築造時期

埋葬施設に直接伴う遺物がないため明確な時期を特定できないが、表土中から出土した鉄製品や須恵器の年代から、おおよそ古墳時代中期中頃から後半の時期にあたると考えられる。 (西川麻野)

注

注1 第V章 自然科学分析「1 板屋谷内B・C古墳群 (4) 須恵器の螢光X線分析」に詳しい。

注2 古瀬清秀 1991「2 副葬品の種類と編年 4 農工具」「古墳時代の研究8 古墳II副葬品」雄山閣

注3 野島 水 1995「古墳時代の有肩鉄斧」「考古学研究」第41巻第4号 考古学研究会

注4 野島氏の分類によれば、IIa類は5世紀前半～中頃、IVa類は5世紀後葉～6世紀初頭が普及時期であるとしている。

B13号墳においては、他の出土遺物との関係等から5世紀中頃が妥当であると考える。

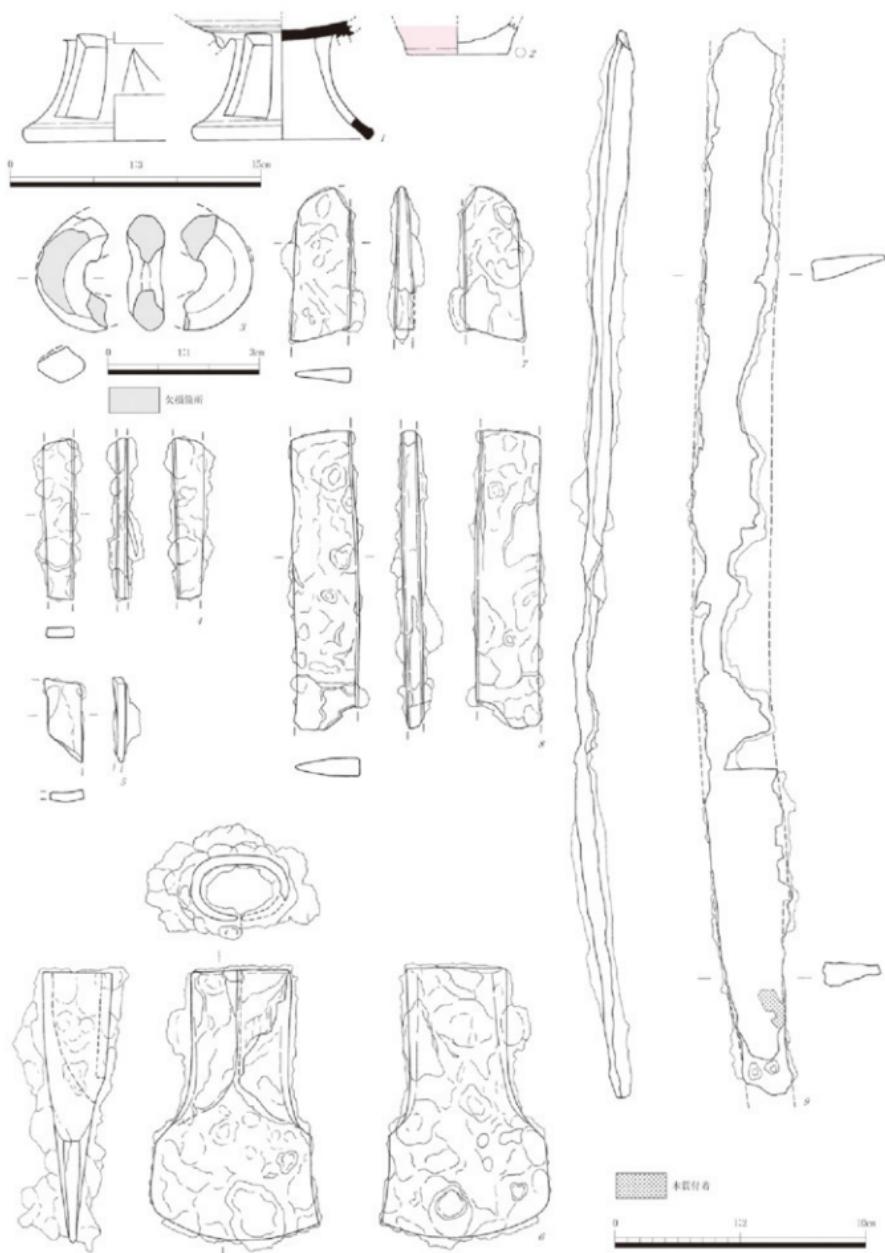
注5 野島 水氏の御教示による。

注6 第V章 自然科学分析「1 板屋谷内B・C古墳群 (3) 琥珀玉の科学分析」に詳しい。

参考文献

宇垣国雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」「考古学研究」第44巻第1号 考古学研究会

石井昌國・佐々木稔 1995「古代刀と鉄の科学」雄山閣



第11図 板屋谷内B・C古墳 遺物実測図 (3 1/1, 4~9 1/2, 10~13 1/3)
B13号墳

(2) 板屋谷内B14号墳

B古墳群の西端に位置し、標高は60mを測る。C古墳群へづく平坦な尾根筋から北側に延びる尾根の頂部に立地し、自然地形を最大限に利用している。墳丘は後世の開墾や土砂の流失により旧地形を留めておらず、墳丘の形状及び規模の確認のため7本のトレンチを設定した。

墳丘（第12・13・15図、図版11～13）

墳丘の西側は後世の土取り等の削平により墳頂部の埋葬施設付近から急斜面となり、南側も昭和段階の開墾により削平を受けており、墳形を留めていない。東側は盛土の流失が激しく、流土の多くはB13号墳との間の自然埋積谷に流れ込む。墳裾は東側の流土の状況と、北側平坦面で確認し、南北約25m、東西約20mの長楕円形の円墳と推定した。北側平坦面は後世の作業用道路として使われていたが、平坦面を境に墳丘の傾斜角度が変換すること、地山単層の土層に変わることなどから、墳裾と判断した。墳丘は地山削り出しの後、墳頂部に盛土を施す。盛土は流失が激しく、遺存状態は悪い。旧表土を整地土として利用し、地山の褐色系砂質土に炭化物混じりのブロック土を含む土が盛土の基調となっている。B14号墳周辺の地山は尾根中では異質で、透水性が低く、かつ輝石混じりの土質である。墳丘には段築やテラス、埴輪等の外表施設は認められない。一部拳大の礫が斜面に集中する地点があり、3トレンチを設定して確認したが、石の統一性や位置の規則性がみられなかつたため、葺石・貼石等の施設ではないと判断した。

周溝（第15図）

3トレンチ、墳丘断面（東西面）で溝状の土層堆積が確認されたが、後世の削平が激しく、平面検出はできなかった。

埋葬施設（SK2、第14図、図版12・13）

墳丘の削平が著しく、位置付けについては困難を極めるが、南北方向のはば墳丘中央に位置するものと想定される。主軸はN-82°-Wである。墓坑の東側端部は、木根の擾乱が激しく確認できなかつたが、規模は現存長2.6m、幅1mを測る。棺の現存長は2.5～2.6m、幅0.7mを測る。棺床部はU字状に掘り込まれ、薄い棺床土が確認できることから、割竹形木棺と考えられる。小口等は検出してない。副葬品はない。

出土遺物

墳丘および埋葬施設から土師器が出土しているが、小片であり、摩耗が激しい。

古墳築造時期

出土遺物がなく、時期の特定はできない。

（杉山大晋）